



ハメ撮りファンタジー

～僕の知らないあの子の素顔～



リーシャ
明るく元気な新米騎士。
同期の幼なじみには
当りが強いが上司から
かばうなど常に
気にかけている。



フロリカ
王宮内の小さな聖堂で
働いている清楚な神官。
主人公と同じ趣味の話で
意気投合する。



ベアトリーチエ
王亡き後の小王国を
切り盛りする賢母と
名高い王妃。一人息子の王子に
王族として厳しく接する。



主人公
僕
新人騎士。
最近急に
幼なじみの事
を意識しだす。



ボーマン
北門守備隊の
隊長であり
二人の上司。

主人公
俺
王宮内の
文書管理室に
勤めている。



リビト
主人公の同僚
貴族のボンボ
ンでチャライ。

主人公
私
跡継ぎの王子。
王都への留学
を夢見ている。



トウルク
王国有数の
商人。王家の
財政改革に
協力する。

第二章
王妃編

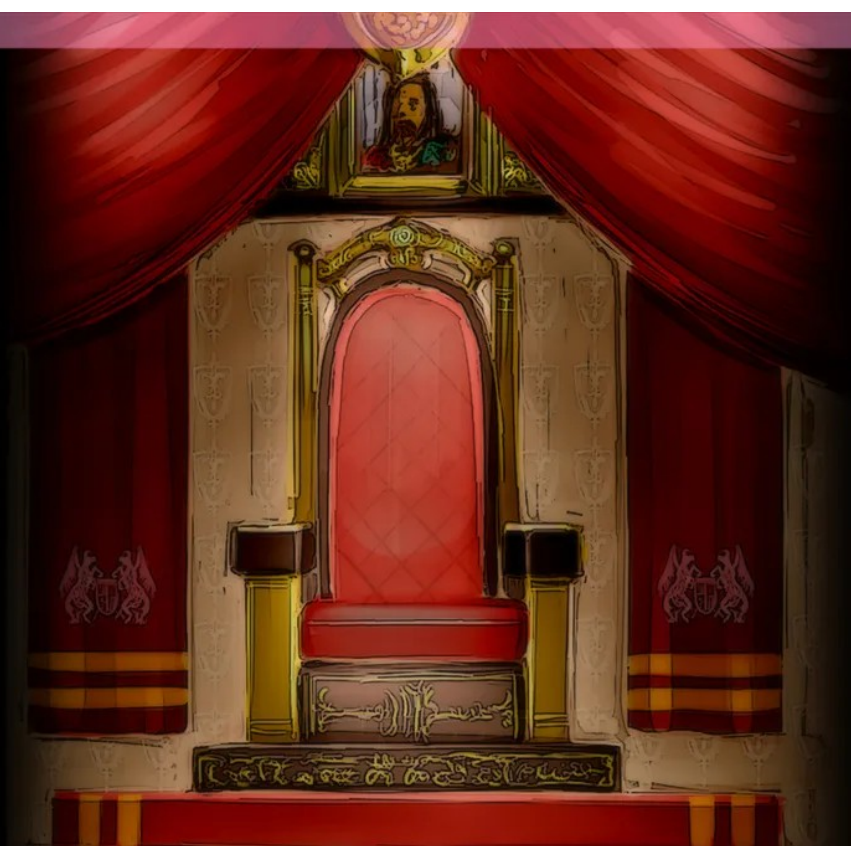
映昌石とは、元を辿ればサキュバス族の得意とする水晶魔術を解析した最新の魔導技術である。北方戦線における魔族への偵察や監視といった軍事的な需要に応える形で開発が進められていった。近年では一般にまで広く普及した映



昌石を小型化し、さらに様々な機能を追加したのがこの映昌機である。各地の士官学校や騎士団に配備されつつあるこの小さな叡智の結晶は、必ずや我ら人族に多大なる福音をもたらすであろう。

第一章 王妃編

玉座の間には誰も居ないようです。
私はその静謐な空間の中心に飾られ
た肖像画を見上げました。厳かな顔付
きは先代の王、即ち私の父上。
この小国の財政再建を目指すも志半
ばで病死なされてしまい……。



当然跡を継ぐのは唯一の長子たる私。
ですが目の前の玉座に座るのは、ま
だ先の事となるでしょう。
それまでは朝から晩まで厳格な家庭
教師たちに囲まれる日々が続くと思
うと、少し憂鬱です。

「これはこれは、王子殿下。相変わらずご聡明なお顔立ちですなあ」
背後から懇懃な挨拶。
振り返ると恰幅の良い体のにこやかなえびす顔が鎮座しています。
「ああ、トウフク殿でしたか」



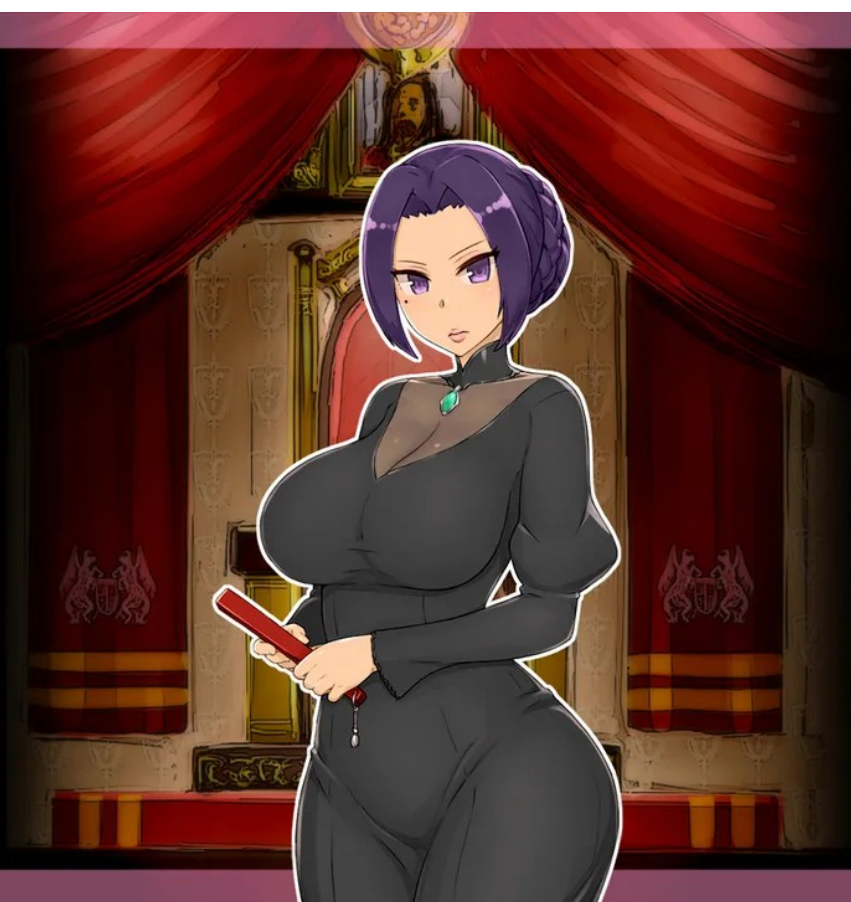
王宮の御用商人である彼は、裸一貫から始めた小さな商會を王国有数の規模にまで成長させ、いまや莫大な金額を指一本で動かせるのだとか。
父上も財政再建の折には彼の力を頼りにしていたと聞きます。

「今日は何か用事でも？」
「まあ、少しばかり野暮用がございま
して……」
せわしない揉み手と満面の笑み。眼
前の商人に気圧されていると、それを
破るように凜とした声が響きました。



「何用かトウフク、例の件は後日にと
申した筈だが」
「こ、これはこれは。ベアトリーチェ
王妃様。い、いえ軽いご機嫌伺いと言
った所でして、へへへ」
叱声に思わず私まで首をすくめます。

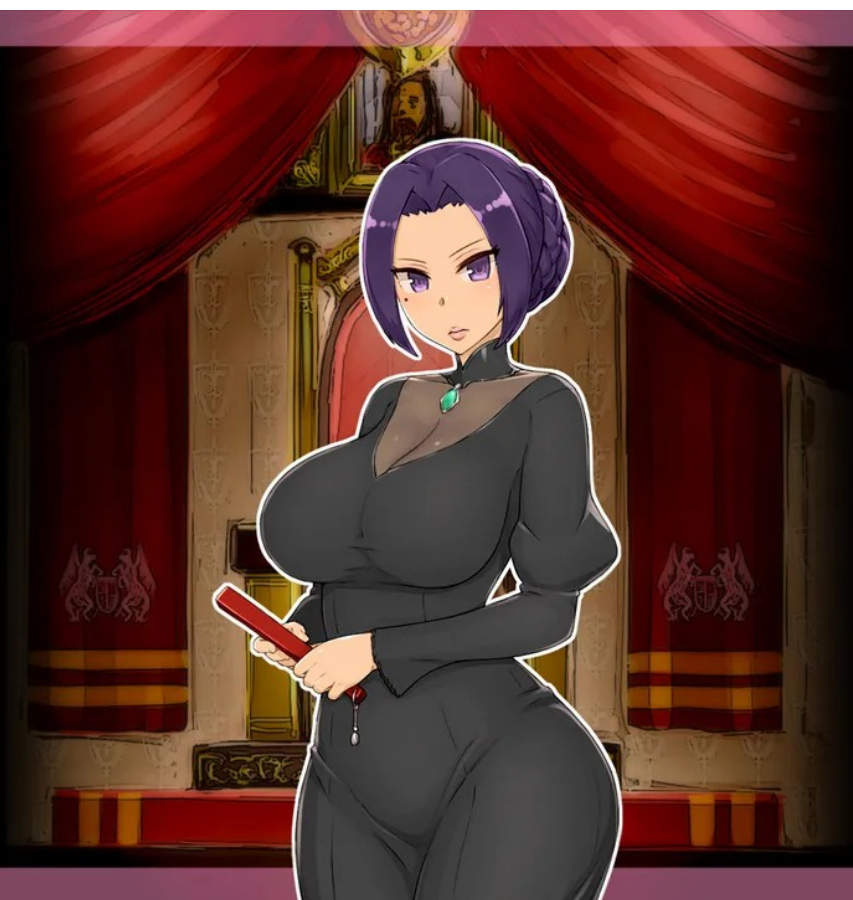
鋭い眼光の前に、トウフク殿も笑顔
をわずかに強張らせながら大人しく退
散するしかなかったようでした。
商人を一声で追い払ったのは誰あろ
うベアトリッチェ王妃。私の母上です。
父上亡き後、若輩の私に代わりこの



小さな王国の摂政を務め、その喪服姿
から王国の黒真珠や黒衣宰相などと呼
ばれ民に慕われているのだとか。
また王宮内では皆に厳しく接してお
り、私の家庭教師の中で最も厳しい先
生の一人でもあります。

「しっかりなさい、王子」
私の方に向き直る母上。

「あのような商人風情に軽々しく言葉を
をかけられ、侮られるなど……」
厳しい視線に思わず目を伏せます。
「あなたはこの国の王位を継ぐ者なの



だから、もっと毅然とあしらわねば」

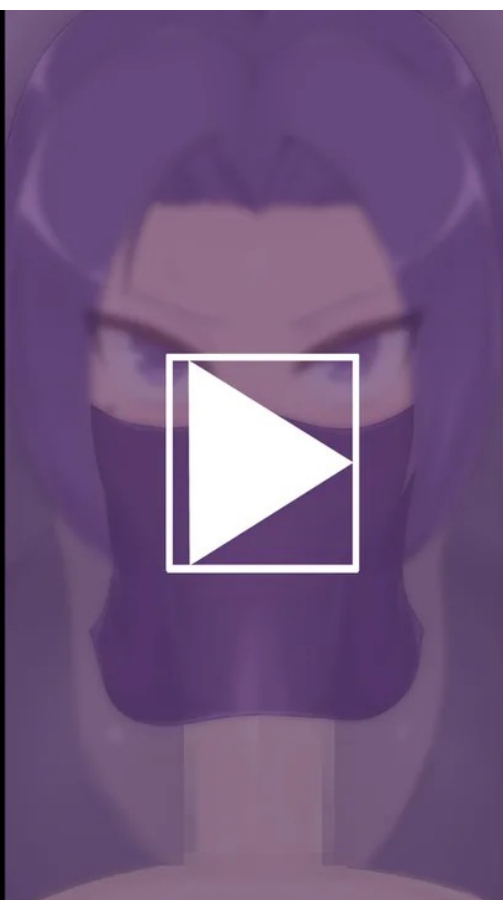
「も、申し訳ありません母上」

このように厳格な母上をしかし私は
深く尊敬していました。肩にかかる責
務を物ともしないその強さは私の密や
かな憧れと目標でもあったのです。



今日の授業は歴史。
母上自らが史書を携え、私の机の前に
立ちます。

賢母と名高い母上は非常に教育熱心で
あり、私の勉強を見ることは午前の重要
な日課でもありました。





落ち着いた声で淀みなく史書を読み上げていく母上。
私も手元の紙にペンを走らせます。

「今日は非常に重要な我が国の歴史からいきましよう。この地方は元々七つの小王国が割拠しており……」



覆面が邪魔やけど
やんごとなきお方は
照れ屋やさかいな

わざわざ
我が屋敷まで
ご足労いただいた
恐縮ですわ



「メル河畔の戦いです」
「よろしい」
ほっと息をつく私。

「……年に、大陸中央に覇を唱えるかの
王国と小王国連合との間に緊張状態が高
まり起きた戦は？」



昼間の王宮では
すげなく追い返して
くれよったけども

あゝその強気な目
たまらんなあ♥
ち●ぽバキバキなるわ



この講義の間に挟まれる質問に答えられないと、出来が悪いときなどは母上の持つ扇子で容赦なく手を打たれることす

おほ♥そうそう最愛の
旦那のち●ぽや思て
ねっとりしやぶるんや



一吸い付く間に国の借金の一吸い
 かかっているやでえ



「この戦いの勝利によって、小王国連合は独立性を維持し……」

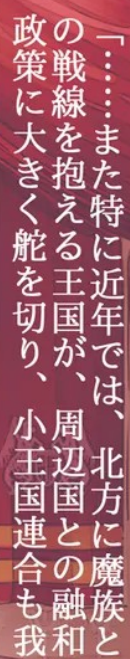
この講義の間に挟まれる質問に答えられないと、出来が悪いときなどは母上の持つ扇子で容赦なく手を打たれることす



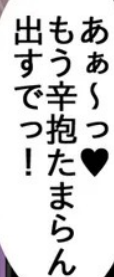
おほ♥そうそう最愛の旦那のち●ぽや思てねつとりしゃぶるんや

ほらもっとしっぴかり吸い付かんかい！一吸いかかっけるんやでえの期日が

グロ〜グロ〜
ス〜ス〜
ニャポポ〜



「が国を含め関係が大きく改善され……」
 そう、だから私には成人したら王都の
 学校に留学したいという夢があつて……。



商人風情のくっさい
ザーメンしつかり
受け止めえや



宮内の小聖堂から響いてきました。
「……今日はここまで」
母上がぱたりと史書を閉じます。

ただ、成人してすぐに王位を継いで欲しい母上は確実に難色を示すでしょう。
と、そこで正午を知らせる鐘の音が王

おくええ子やな
約束に色つけて
あと二週間待ったる

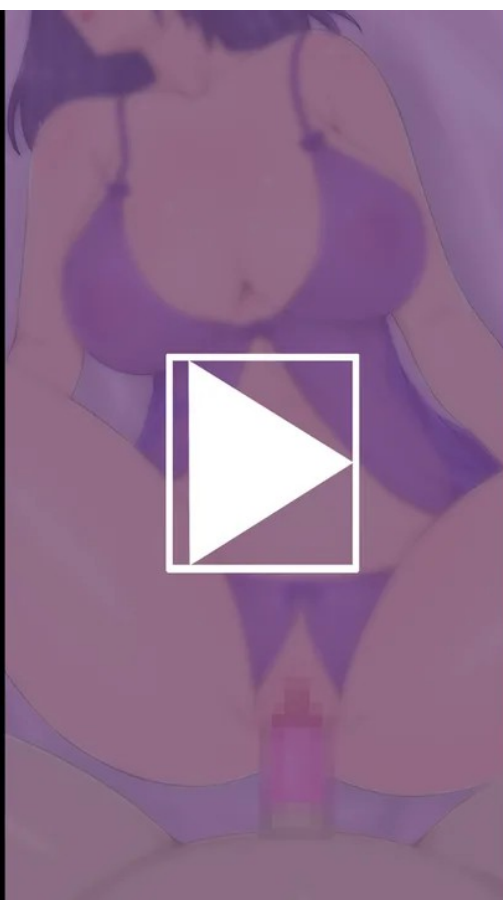


ふうっ♥おっ
そうや飲み干したら
ポーナス出そか



今日の授業はまた歴史です。
「前回はこちらまで進んでいましたね。
はそのまま、次のページの……」
で

先日の授業内容を振り返りながら、
つもと変わらぬ様子で史書のページを
めくる母上。





関係も多く結ばれ、王族同士の血脈は密接に絡みあっているのです。そもそも私も……」

「我が国を含む小王国連合はいにしえより、戦乱の時代でも王族同士の交流が盛んであったようです。また政略的な婚姻



条件弾んだるのに…
勿体無いなあ

やっぱり生はあかんか
ほんま強情やで



そう、母上も隣国の王家からこの国に嫁いできたのです。古参の侍女によれば、当時からその美

貌は近隣に知れ渡っており、輿入れの行列を一目見ようと街道沿いは民衆でごったがえしていた程だとか。

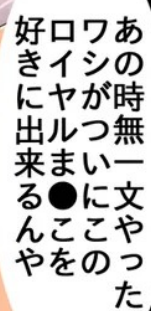


ま、ええわ
しっかしまさか夢にまで見た体が目の前にあるとはなあ

今でも覚えてるわ
群集に混じって見た
あんたの姿を



「……時代には二つの王家が同時に断絶の危機に見舞われるという事件が起きましたが、これも隣国の王家からの……」



しかしあんたは
あの時から変わらん
な
お世辞やないで？



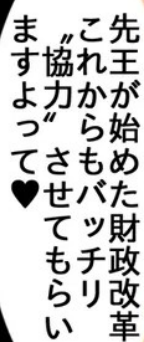
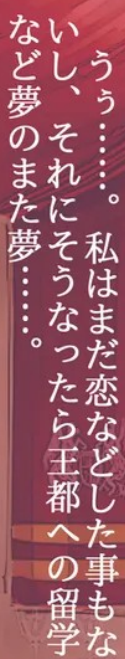
「ええっ……。わ、私にはまだそのような事は早いかと」
母上の話に思わず赤面してしまいます。

「このように王族同士での婚姻は非常に重要な王家の責務といえます。それに王子、貴方にもいずれそのような話が……」



欲求不満ま●こがいやらしく吸い付いてきとるで♥ほれそろそろイクか？

あー、一人産んだとは思えん締めまりや♥それにどうやらだいたいぶご無沙汰みたいやな



玉座の間には何故かまた、トウフク
殿が居ました。
「……今度は趣向を変えて……、この
前で……」
玉座を見ながら、何やら小声で呟く
彼に声をかけます。

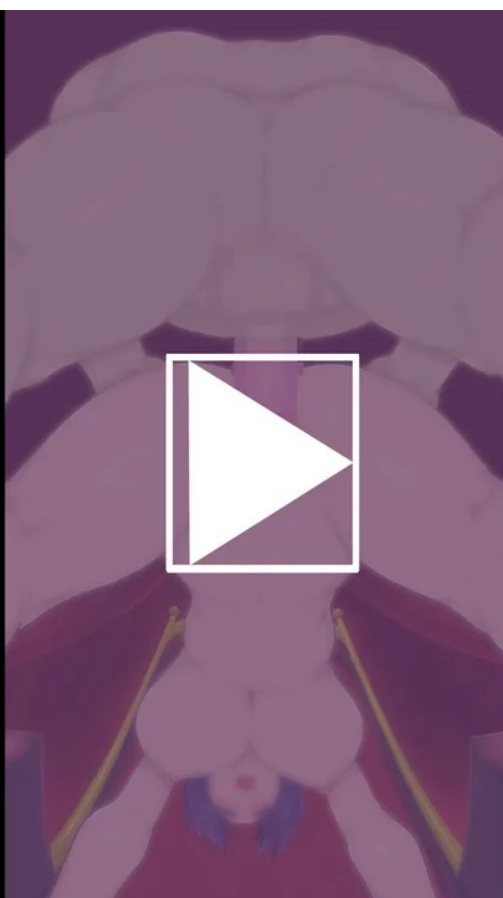


「おっと、驚かせんといってくださいよ
王子殿下。いえいえ、用事と言う程で
も。ではまた王妃様に叱られる前に退
散させてもらいますわ」
怪訝な顔の私を尻目に彼はそそくさ
と帰っていききました。



今日は苦手な古典文学の授業。
退屈で難解な古の文字列は、眺めるだ
けで嫌になります。

古代王国で編纂されたという詩集の複
製本をゆっくりと読み上げていく声に誘
われ、重くなってゆく私のまぶた。





それに今は……、まあいいでしょう」
少し苦い顔をしながら、それでも母上
は語り始めました。

これはまずいと、古参の侍女から聞いた話を少々唐突に母上に振ります。
「あの者は昔からお喋りが過ぎますね。」



そら、こんな玉座の真ん前でヤルんや興奮するわなあ♥

おお？随分とすんなりワシのち●ぽ飲み込むやないか



「しかし父上は周囲の反対を押し切って、
それで当時は騒がれたと」
「それはまあ、事実です」

「隣国での舞踏会の後、若き日の先王が
私に手紙をくださったのは本当です。し
かし、大恋愛の末などというのは……」



この王の間で初めて
拝謁の栄を賜わった時は
えらい感激したもんや

しっかし
先王様にはほんま
お世話になりましたわ



家も次第にその熱量に折れる形で……」
そしてその話が広まり、国中で騒がれたのだそうです。

「無愛想で氷の姫などと呼ばれていた私の何が良いのかあの人はしつこい位に手紙を送ってきて……。反対していた両王



ほら王妃様
先王様の御影もばっちり
見守ってはるで♥

その恩返しを今
させてもらお思てね
こんな風に協力しとる
んですわ



侍女の話によれば、長身で痩せ型の父
上と並んで歩く母上の姿はまるで一枚の
絵画のようで、当時批判的だった王宮内

も次第に静まっていったのだとか。
「も、もちろんあの人には大変優しくし
て頂いて、その内に貴方を授かって……」



おお♥やっぱり
いつもより興奮しとるな
締め付けが段違いや♥

ほなそろそろイこか♥
先王様の前でばっちり
アクメさらすんや



侍女の話によれば、長身で痩せ型の父
上と並んで歩く母上の姿はまるで一枚の
絵画のようで、当時批判的だった王宮内

も次第に静まっていったのだとか。
「も、もちろんあの人には大変優しくし
て頂いて、その内に貴方を授かって……」

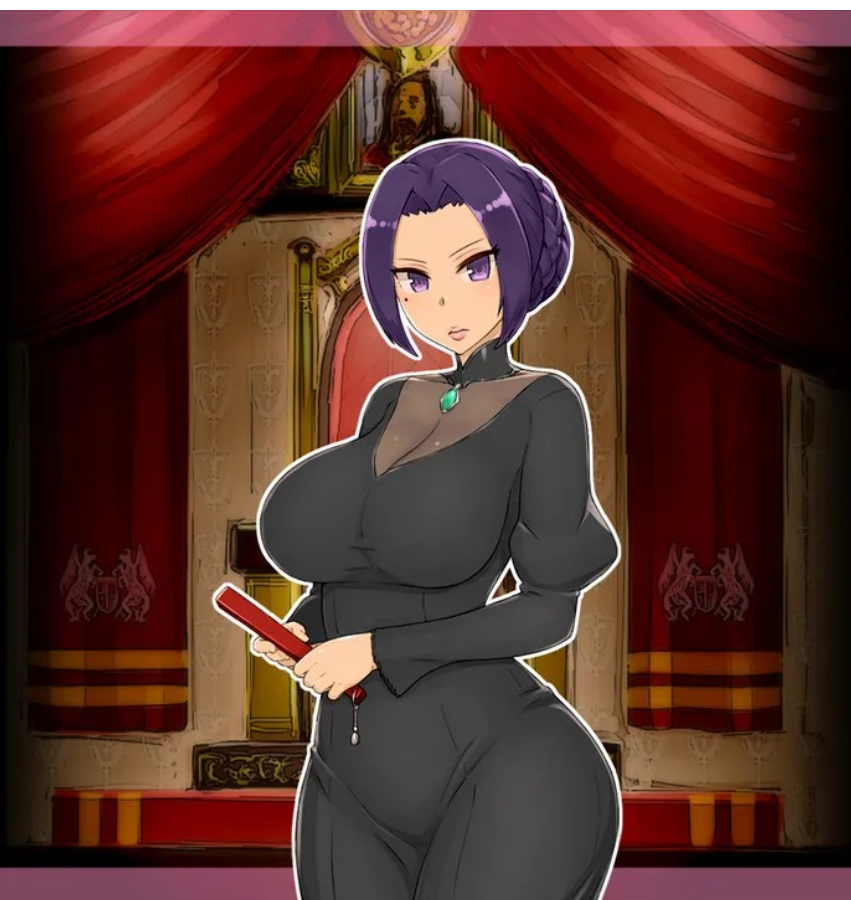


おお♡やっぱり
いつもより興奮しとるな
締め付けが段違いや♡

ほなそろそろイこか♡
先王様の前でばっちり
アクメさらすんや



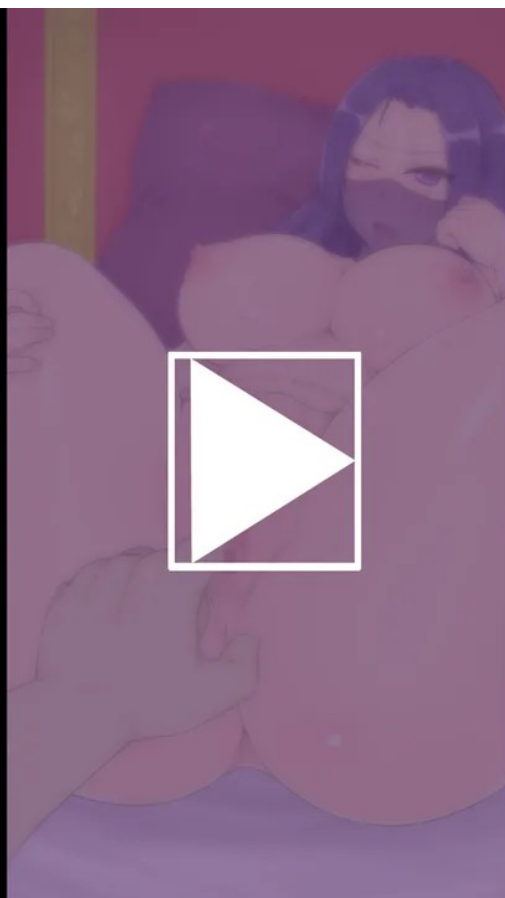
……眠れないので私は、少し王宮内を
散策する事にしました。
薄暗い廊下を抜けた先には執務室か
ら漏れる灯りが見えます。
扉の隙間から覗き込むと、母上がま
だ政務をしている様でした。



険しい表情で書類の束を睨む母上。
眉間にしわを寄せ、時折ため息をつ
いています。あのような姿は見た事が
ありません。おそらくは財政状況に心
を痛めているのでしょうか。私は声をか
けられぬままその場を後にしました。

母上は公務でご多忙との事で、他の家庭教師も予定が付かず、本日は急遽自習となりました。

身が入らずに休憩していると、トウフク殿が廊下を歩いています。私は彼に尋ねてみる事にしました。





のですか？母上も特にお忙しそうだし」
「ふむ、そうですねあ」
己の丸いあごを撫でるトウフク殿。

「おや王子殿下、奇遇ですな」
「トウフク殿、実は聞きたい事があつて
……。我が国の財政状況はそんなに悪い



ほんまの一発勝負
国を背負った賭けや



さあ今からひとつ
余興といこか
負ければオシオキ
勝てば借金全てチャラ



す。ですがこのトウフクも王家に恩のあ
る身にて、支援を惜しまぬつもりで」
「そうですか、返済が……」

「歴代の王が残された負債がやはりあり
ましてな。ワシの商会への支払いも少々
滞っている所があるのは事実でございま



もつともほら
はやくも糸引いて
しもてるけどね♡



借りたもん返さへん
この強欲なま●こが
はたしてお行儀良
我慢できるのか





をドンと叩いて言いました。
「不肖このトウフク、また何かご相談が
あればなんなりとお答えしますぞ」

「ほほ、大事な一粒種。手元に置いてお
きたい言うのも親心ですな」
しきりにうなずくと、トウフク殿は胸

いや〜ほんまこの
年増ま●こは貞淑さの
カケラもないなあ♥

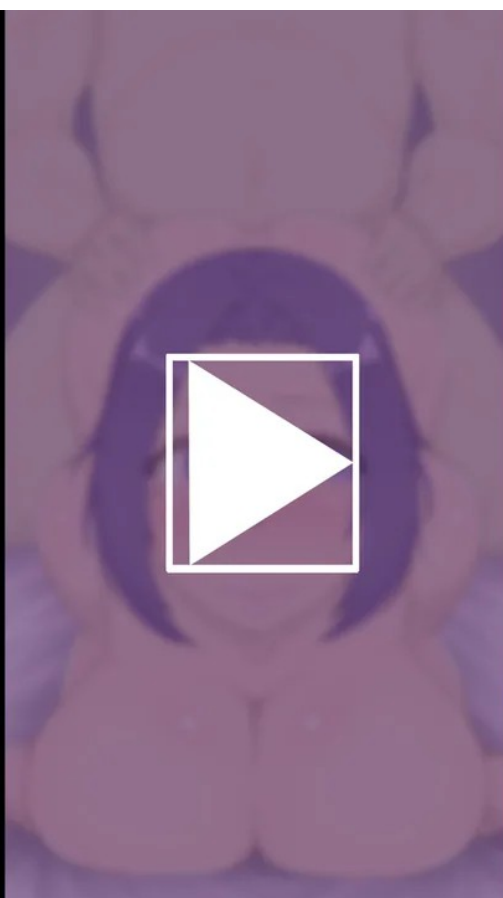


見てみいこの染み
だらしく潮吹いて
垂れ流しとるわ



「今日は一体どうしたのです？先程から授業にまったく集中出来ていないではありませんか」

険しい顔で私を咎める母上。私は観念して留学の事を母上に話してみる事にしました。





「成人の儀よりさらに数年、王位継承を
遅らせるなど話になりません」
「で、ですが……」

「それはなりません」
私の言葉を予想通り、いえそれ以上に
ばっさりと母上は切り捨てます。



…わたくし
王妃ベアトリーチェは
只今より

先日の勝負に負けた
お仕置きを受けねば
なりません…



私が口を挟むまもなく、母上は理路整然と反対理由を並べていきます。
「……」

「貴方は先王の唯一の嫡子。なにかあれば我が王家の断絶を招きましょう。それに……」



トウフク様にせつかくのチャンスを与えられながら

わたくしのはしたない
おま●こは…あんっ♡
簡単に負けてしまい…♡



母上の言葉はもはや止まらず、私は昔、累代の甲冑を倒してしまった時の様に黙っているしか出来ませんでした。

「……貴方はもっと誇り高き王家の血脈たる自覚を持って、先王様の様に立派な振舞いをしなくては……」



トロトロの危険日
生ま●こを味わって
いただいてえっ♡

その罰として今
生ち●ぽガチハメ
種付けセックスで



為す、それが即ち王の為政……、ふう」
俯く私に気付いたのか母上は少し表情
を緩めました。

「いいですか、貴方に課せられた王族の
責務を今一度考え、国民のよき手本とな
るように。天に恥じる事なきおこないを



肉穴奴隷としてっ♡
精一杯ご奉仕しなくては
ならないのですうっ♡

王家の負債を返済する
までっ♡わたくしは
トウフク様のお♡



「いいですか、貴方に課せられた王族の責務を今一度考え、国民のよき手本となるように。天に恥じる事なきおこないを

為す、それが即ち王の為政……、ふう」
俯く私に気付いたのか母上は少し表情を緩めました。



王家の負債を返済する
までっ♥わたくしは
トウフク様のお♥

肉穴奴隷としてっ♥
精一杯ご奉仕しなくては
ならないのですうっ♥



「は、はい……。私が間違っていました。
わがままを言ってごめんなさい……」
王都に行く夢は夢く消えた様でした。

「それに例の、貴方のお妃候補の話も少
しずつ進んでおります。相手の姫君を何
年も待たせる訳にはいかないでしょう？」



ごめんなさい王子
貴方に弟が出来ちゃう
かもしれない
♡

あぁ♡王族の
高貴なる子宮に平民の
子種汁流れ込んで♡

「おお……。留学の話お聞きしました
で。残念なことですね」
「いえ、やはり只のわがままで……」
「ふむ、どうですやろ。気晴らしにワ
シの別荘にお越し頂くいうのは」
留学を反対されて落ち込む私を励ま

そうとしてくれているのでしょうか。
「しかしそれは……」
「いやいや、これも見識を広めるため。
そう、留学の代わりですわ」
トウフク殿は声を潜め、私に丸い顔
を近づけます。

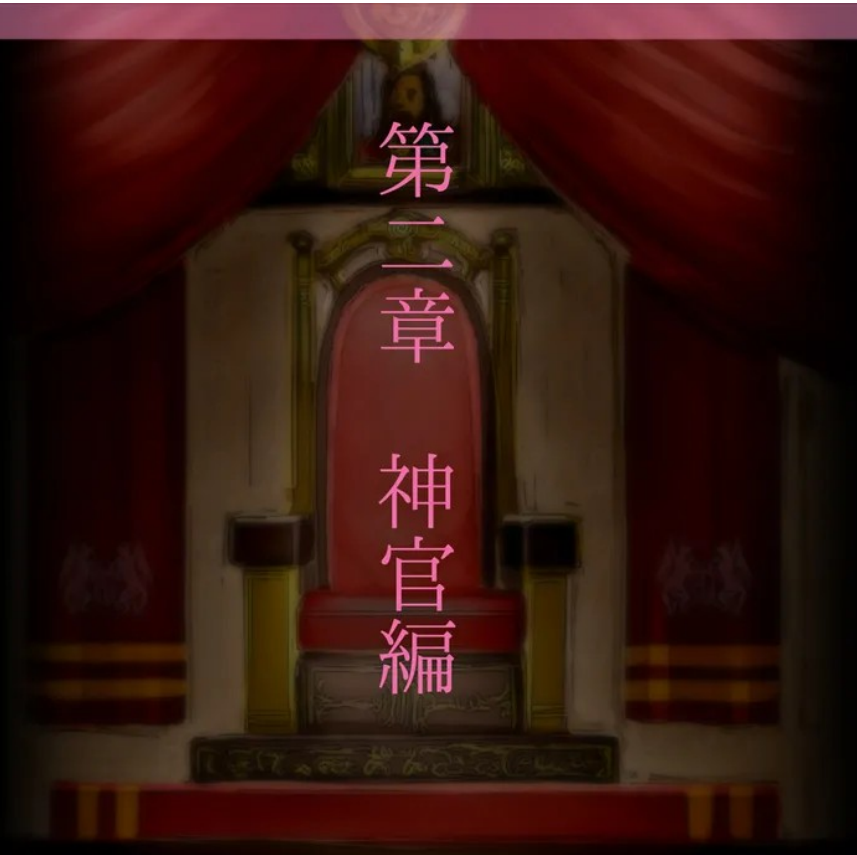


「それに王子、ワシが厳選したメイドも沢山おるさかい、選り取り見取りでっせ。気に入った子は夜伽にでも」
「そ、そのような事私にはまだ……」
「なあに、軽い息抜きですわ。王族なら誰もが通る道です」



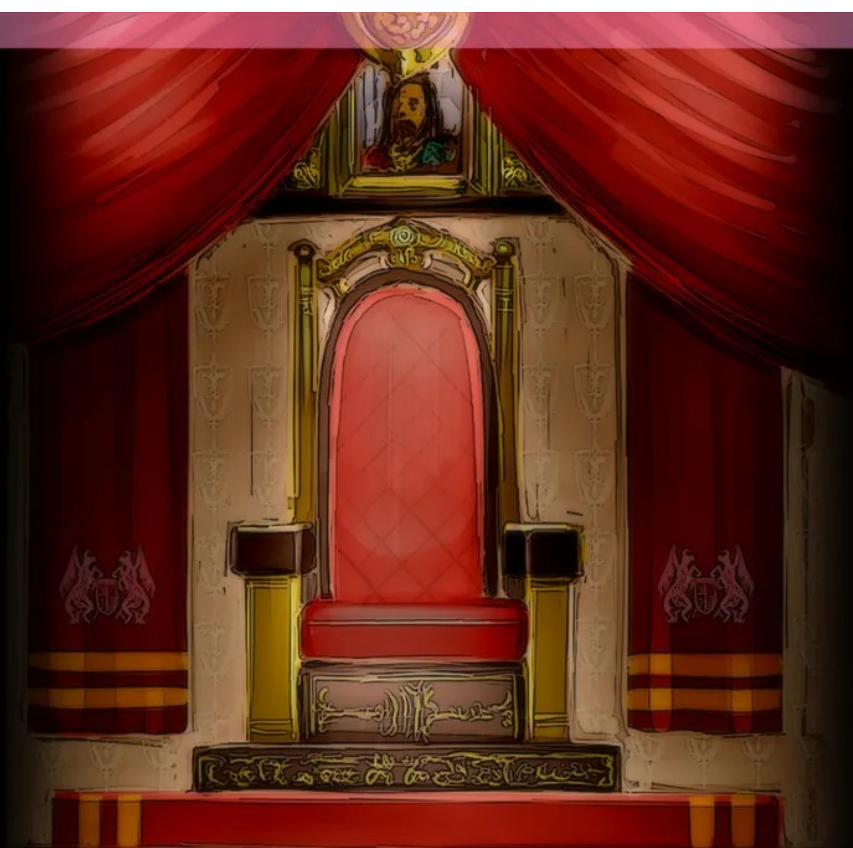
……これは危険な誘いだと頭では理解
していても、私の言い訳は言葉巧みに
剥がされていきます。
「王妃様には内緒にしとくさかい……」
その言葉は不思議と私を楽にしつい
に首を縦に振ってしまったのです……。

く王妃編完く

A central illustration of a throne with red curtains. The throne is ornate with gold and red. Above the throne, a small figure is visible. The background is dark, and the entire scene is framed by a purple border.

第二章 神官編

王宮内の一室で、俺は小説のページをめぐりながら時間を潰していた。何故なら今日の分の仕事は既に片付けてしまったから。いや、別に俺が優秀とかではない。地方の士官学校からなんとかここの



王宮に就職できたのだが、配属された部署がこの暇な文献管理室だったというオチだ。少々退屈な事に目をつむればまあ、本好きの自分にとっては居心地の良い職場と言えるだろう。

「いや、ヒマっすね、先輩」
ダルそうな口調で話しかけてきたのは後輩のリヒト。
貴族の三男だか四男だかで、コネでここに入ったらしい。跡を継ぐ可能性が薄い貴族の子弟の定番コースだ。



「なんだ、お前も終わったのか」
ちなみにこの部署には俺とこいつしか居ない。
俺とは育ちから何から違うのだが、意外とウマが合った。
まあ悪い奴ではなさそうではある。

只年齢イコール彼女いない暦の俺と違ってこいつはそこらへん派手らしい。いわゆるチャラ男ってやつだ。貴族だから社交的でモテるのか？「あれこの文献、っていうか小説か？違うとこのですよ。これ間違っってウチ



に来てますね」「どこのだ？」「聖堂の神官室ですね。あそこ可愛い子多いんですよ。でも自分ちよっと……」「仕方ないなあ、俺いつてくるわ！」「簡単な手に乗せられる俺……」

「すいませーん、文管室でーす」
少しためらいながら聖堂に入ると、
処女懐胎の逸話を持つ聖母像が壇上か
ら見下ろしてきた。
「はーい。何か御用でしょうか？」
白を貴重とした神官服に身を包んだ



女の子が物腰柔らかに対応してくれる。
(か、可愛い……)
「あっああ、あのおっ！ま間違ってこ
っちにこの本が来ちゃったみたいでっ」
思わず緊張してどもる俺。
「あら、私が頼んだ本」

「そ、それって砂球物語の新刊？」
「はい。え、知ってるんですか？ 私このシリーズ大好きで、だから城下町の本屋さんにもいつも頼んでたんですけど中々届かなくて。でも嬉しい。私周りに同じ趣味の人居ないんですよ」



「この本に心から感謝である。
私のフロリーカっています。良かったら時々聖堂にも寄って下さいね」
本を大事そうに抱えてはにかむ彼女。
……本当にあるんだな、運命の出会いって。」



それから俺は、この小さな王宮内の聖堂にちよくちよく足を運ぶようになった。目的を察した後輩のニヤケ面にも気付

かない体で、今日も昼休みに文管室から抜け出す。なぜなら彼女はこの時間、かならず聖堂にいるからだ（俺調べ）。





エックしてたから」
彼女とは不思議とジャンルや好きな作
者も合うみたいだった。

「え、すごい。あのシリーズもご存知な
んですか？」
「まあね。俺、売れる前からあの作者チ

え？
つけなくていいよ
私生好きだもん♡



ほくら♡
おち●ぽパクっ♡



それに大好きな
リッ君のち●ぽ
直接感じたいの♡



大丈夫だよ
今日は安全な
日だから♡



る球技を題材にしたスポーツもので、士官学校の部活動をメインに描いている人氣作品だ。

「そういえばこの前の最新刊はどうだった？砂球物語の。俺も昨日読んでさ」
件の砂球物語とは、南方で流行ってい

ふふっリッ君ったら
そんな顔しちゃって
かわいい♡



は♡私のおま●こでシコ♡
生♡シコ♡



アツいですよね！それにあの人が怪我しちゃって……。やだ、もうこんな時間！」
壁の魔力時計を見上げて慌てる彼女。

この作品がヒットした影響で、砂球を始める人が急増しているのだとか。
「新しくライバル校が登場して、展開も

いつも負けちゃう
生意気ち●ぽにお仕置き
しちゃうぞ♡



うりうり♡
リッ君の大好きな
高速生ま●こコキだ♡



アツいですよね！それにあの人が怪我しちゃって……。やだ、もうこんな時間！」
壁の魔力時計を見上げて慌てる彼女。

この作品がヒットした影響で、砂球を始める人が急増しているのだとか。
「新しくライバル校が登場して、展開も

いつも負けちゃう
生意気ち●ぽにお仕置き
しちゃうぞ♡



うりうり♡
リッ君の大好きな
高速生ま●こコキだ♡



「お昼休み終わりの鐘を鳴らさなきや。
うふふ、あなたとお話しているとすぐに時
間が経ってしまいますね」

んっ♡おち●ちんが
私の中でびくびくしてる♡
いっぱい出てくるね♡

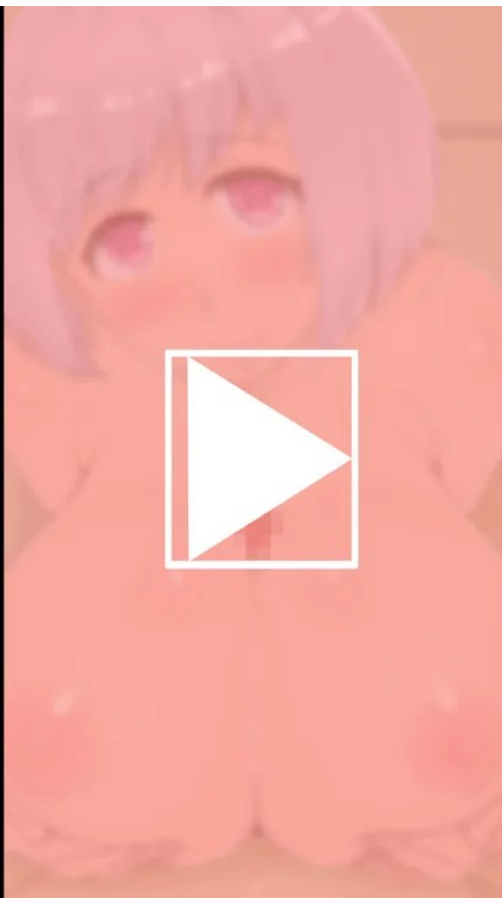


あっやだっ♡あんっ♡
もう…また私が
イカされちゃった♡



今日も王宮内の食堂で手早く日替わり
定食を胃の中にかきこむと、優雅にデザ
ートを注文する甘党の後輩を置いて俺は

聖堂へと足を運ぶ。扉を開けると彼女は、
聖堂内に差し込む光よりも眩しい笑顔で
俺を迎えてくれた。





俺の苦しい言い訳にも彼女は笑って相槌をうってくれた。
「ふふっ、そうなんですか？」

「こんにちは、最近よくお会いしますね」
「いやあ、ちよつと食後の散歩の休憩にね、あはは。最近太っちゃって」



はいっ♡
これでいい？

え？
今日は胸で〜？
ふふ♡仕方ないなあ



「昔からこれでからかわれる事も多くて。だから男の人が少し苦手だったんです。でも今は少し自信も出来て……」

確かにこんなに大きいと目立つもんな。ん？でも俺には普通に話しかけてくれるけど……。



そ、そう大好きなんだ
うふふ♥

じゃあいい
気持ちよくして
あげちゃうね♥



「昔からこれでからかわれる事も多くて。だから男の人が少し苦手だったんです。でも今は少し自信も出来て……」

確かにこんなに大きいと目立つもんな。ん？でも俺には普通に話しかけてくれるけど……。



そ、そう大好きなんだ
うふふ♥

じゃあいいっぱい
気持ち良くして
あげちゃうね♥



そ、そんなに俺との会話が楽しいって事？これはもうフラグが立ってるんじゃないか……？

「それに私、少し前までかなり落ち込んでたんです……。でもこうやって話したら大分楽になっちゃいました」



おっぱいの中で
ピュッピュッ
してる♡♡

あゝ♡
リツ君もう
イっちゃったのぉ？



の懺悔になりますけど、うふふっ」
そういつて悪戯っぽく笑う彼女に、俺
は完全に心を奪われていた。

「そうだわ、もし何かお困り事とかご相
談があれば、また今度私がお聞きします
よ？懺悔室がないので、聖母様の御前で

もうそんなに
気持ちよかったの？
ふふっ嬉しいけど♡



ほら見てえ
リッ君胸だと
すぐ出しちゃう♡

くすっ♡

ドロ…♡

アキア…♡

タタ♡



興味津々の後輩に色々と聞かれたが、
当然フロリーカちゃんの事は教えない。
彼女はお前みたいなチャライ人種と関

わっていい子じゃないのだ。
適当にはぐらかしつつ、今日も俺は心
のオアシスへと向かうのだった。



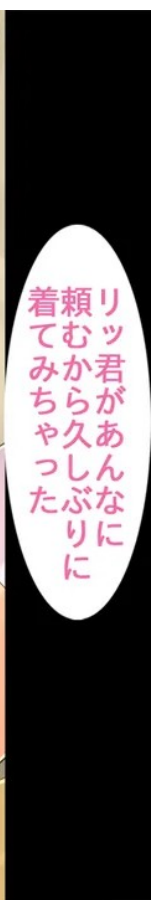


「へえ、すご。有名なところだ」
「神官科を出てすぐ、この地方の聖母教会に所属して、そこからの派遣ですね」

「そういえばフローリカちゃんはどこ卒業なの？」
「え、私ですか？聖ベロニカ付属です」



「どうかな…
似合ってる？
あ、ありがと」



「リッ君があんなに
頼むから久しぶりに
着てみちやっただ」



話す事はなかったですね
これは全然あるだろ……。いや、俺も
童貞だし、お互い初めて同士みたいな？

「神官科って女子が多いって聞いたけど」
「そうですね、ほぼ女子校みたいでした」
男子は別クラスで分かれてて、ほとんど

私の初めては
全部リッ君に
あげちゃった♡



うん、今まで
付き合った事なくて
そう、学校でも



「あ、じゃガラの街とかわかる？」
「はい、その近くの村に住んでました」
「えっ、ほんと？俺もその近く」

こほんと咳払いで一旦邪念を払う俺。
「じゃ、じゃあ出身はどの辺なの？」
「ブール・デナ地方の田舎の方です」



あつやだっ
どうしたの
急にそんなっ

だから私の体は
ぜくンぶりッ君だけ
のモノだよ



珍しい屋台も多くて周りの村から人が押し寄せるんだよね」
「私、あの飴細工の屋台が好きで……」

「あら、奇遇ですね。ガラのお祭りとか行かれてました？」
「行ってた行ってた！ いや〜懐かしいな。」



もっと乱暴に突いてっ♡
おま●こメチャクチャに
してえっ♡

今日のリッ君
いつもより激しくて
でもそれもいいっ♡



「つーか、もうイケるっしょ」
「へ？」

後輩に思わず聞き返す俺。
「いやだってそこまで話も趣味も合う
なら告ってつきあえばよくないスか？」
仕事中にとんでもない事を言い出し



やがって。暇か。
「なんか俺に名前教えてくれないスけど、その子神官なんでしょ？」
「まあ、な」
「ゆーてあいつら結構簡単にヤれますよ。俺も少し前に……」

「いや彼女はそんなじゃねーよ」
こいつみたいなチャライ男に股を開くようなビッチでは断じてない。
だがリヒトの言う事にも一理あるかもしれない。
正直手応えはあるというか、もう好

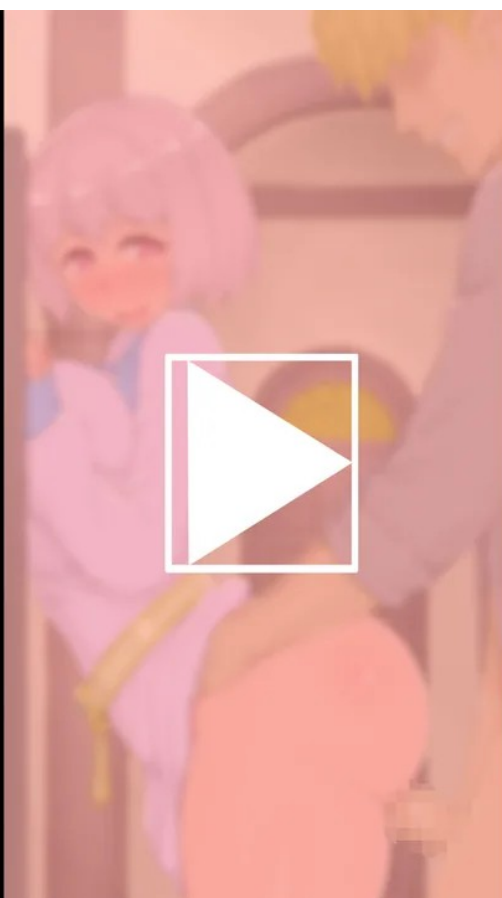


感度はかなり高いはず。むしろもう両
思いといっても過言ではない気がする。
確かにこの状況、あとは俺が勇気を
出すだけじゃないか？
……っし。ここはもう、いっちゃいま
すか！



聖堂の扉の前で、幾度か深呼吸を繰り返す。
鼓動はまるで早鐘の様だ。

落ち着け、俺……。
昨夜必死で考えた告白を頭の中で反芻しつつ、扉を開け彼女の前に立つ。









心なしか食い気味に答える彼女。
「えっ……、あ、あーっ、違う違うっ！
これ友達の話でえっ。やっ、やだなあ〜」

「ごめんなさい、私は聖母様にその身を
捧げた敬虔なる信仰の使徒。そういうお
話をお受けする訳にはいけないのです」



おち●ぽ大好き女です♥
乱暴におま●こ突かれるのが
一番好きですうっ♥

聖母様申し訳ありません
私、神官フローリカは
只の淫乱な





みたいで、はは……。あっ！ちよっと
急用を思い出した。じゃ、じゃあまたっ」
俺は小走りで聖堂を後にした。

「あつ、すいません。私ったらつい勘違
いしちゃったみたいで。恥ずかしい」
「とと友達がこんな風に告白しちゃった



分らない感覚かな
でも私も赤ちゃん
出来ちゃうかも♡

ああん♡中にいっぱい
ぴゅっぴゅっして
うふふ、聖母様には♡

「でその前の女が……理がこないって
言い出し……ぜったい産むとか……正
直ウザく……結局勘違いで……」
リヒトの元カノ話が続いている。
……あれから聖堂には行っていない。
「先輩元氣ないッスね。やっぱ振られ



「……」
「たのマジなんスカ」
「……」
「聖堂にいる子で先輩みたいなのが好
きそうなタイプって、たぶんフローリ
カあたりでしょ？」
「うぐっ……」

「さっきの話、その子ですよ」
「え？彼女、お前の元カノ……？」
「結構チョロくてすぐヤレましたけどね。俺が初めての彼氏らしくてメチャ
尽くしてくれたし」
「へ、へえ……」

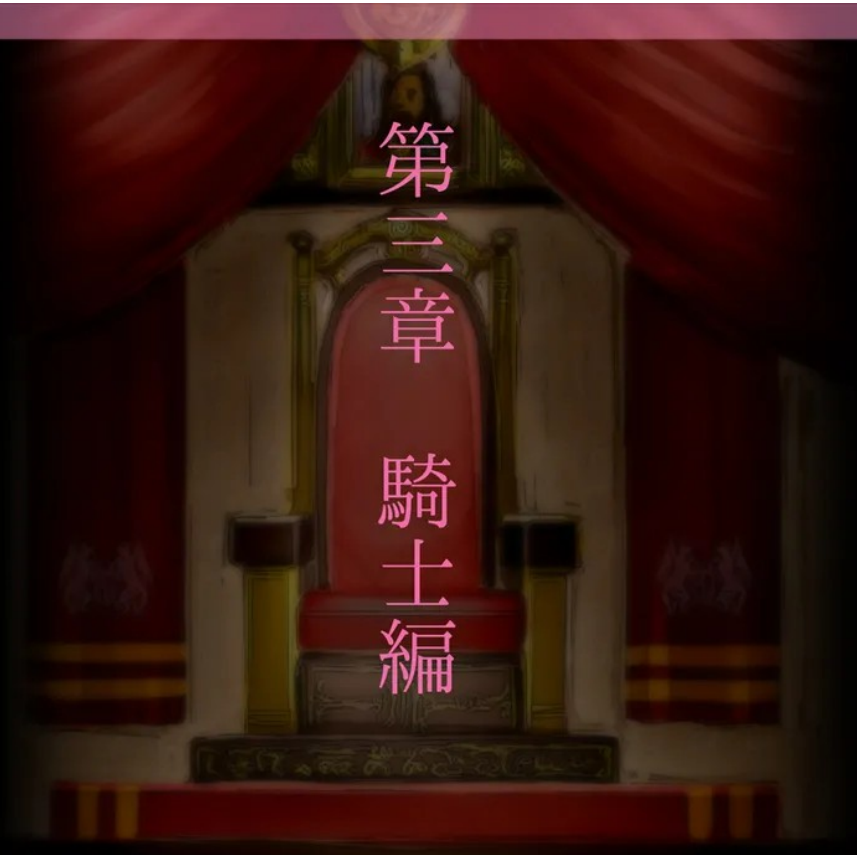


「まあでもあいつ面食いつて言ってた
からな」
「……たしかに、俺の学生時代のあだ名
は眼鏡オークだけでも。性欲も強くて」
「う、うそつけ」

「いやマジですって。ハメ撮りも結構残ってますもん。そうだ、俺今月割りと金欠なんで、なんか飯奢ってくれたら動画全部送りますよ」
はあぁと俺は大きく溜息を吐く。
舐められたもんだ。所詮人生イージー



モードの貴族のお坊ちゃん。人の心などわからないのだろう。俺は鼻で嗤って奴にびしっと言ってやったよ。
「金の豚亭スペシャルランチに日替わりデザート食べ放題券十枚つけます」
く神官編完く

A central illustration of a throne with a red cushion and a crown on top, flanked by red curtains. The throne is set against a dark background.

第三章 騎士編

乾いた唇を舐めてうるおした。
うう、緊張する……。
この騎士団に入団して今日が初出勤。
僕が配属されたのはこのやや陰鬱な
北門の守備隊だ。もちろん花形部署と
は言いがたいだろう。

でも人気のある儀仗隊や近衛騎士な
んかは、当然貴族閥で占められている
と聞く。平民出身の僕が騎士になれる
のも小さいとはいえなんとか王国騎士
団に入れたのも、王立卒という肩書き
のおかげなのである。



「何難しい顔してんの、あんた。お腹
でも痛いのか？」

同期のリーシャが話しかけてきた。
同じ村出身の幼なじみでいわゆる腐
れ縁というやつだ。裕福な商家の末っ
子なので甘やかされて育った。そのせ



いで同い年の僕は昔から手下扱い。今
まで散々振り回されてきた。

「今日からあたしと同じ騎士団で働く
んだから、もっと喜びなさいよね」
はあ、やれやれ。僕の進路先を強引
に書き変えさせたくせに……。

「うゝす。揃ってんなあ、新入り共」
隊長が来られた様だ。僕とリーシャ
は整列し背筋を伸ばす。
「俺あ北門守備隊隊長のボーマンだ」
ボーマン隊長の目が僕に向く。
「なんだあ、随分とヒョロいな新人。」

そんなんで騎士が務まると思っ
てんのか？近頃の若い奴は根性ねえからなあ」
そういつて隊長は僕の首根っこを掴
み酒臭い息を吹きかけてきた。
驚いて何も言えない僕。
「やめて下さい」



リーシャが毅然と割って入る。
「冗談が過ぎますよ。酔ってるんですか隊長？」
「おお？いいね、生意気だね」
無精ひげのちらばるあごを撫でながら隊長が口をゆがめる。

「まあとにかくこの財政難の折、我が隊も少数精鋭、一騎当千。兵士共に舐められんように気張ってけよお前ら」
隊長は僕達に指示だけ出すと詰所へと戻っていく。そうして不安を残しながら、一日目は過ぎていった。



数日後、城門の側にある詰所で隊長が歓迎会を開いてくれたのだが……。

「なんだあもう終わりかあ？口ほどにもねえなあ」

「ま、まだ余裕ですけど」

早々にダウンした僕の視界の端で、



リーシャはがばがばと杯を重ねているようだった。

それを尻目に僕はふらふらと外に出て堀に胃の中の物を吐き出した後、隣の騎士団寮にある自分の部屋に戻りそのままベッドに倒れこんだ……。



隊長が来ないので朝礼もなく、兵士達は配置当番表に従って思い思いに散っていく。

門の前に残ったのは僕とリーシャの二人だけ。そうだ、僕が帰った後の事でも聞いてみるか。





飲んで解散って感じ。うん、あんたが帰った後すぐ終わったし。しっかしあんた、相変わらず弱いんだね」

「なあリーシャ、昨日はあの後どうだった？ 僕すぐに気持ち悪くなっちゃってさ」
「えっ、べ、別に普通だけど。しばらく

まさかま●こも
新人かぁ？



あ…
れ…？

お？ おう♡
きつついねえ
この感触は



リーシャがクスツと笑う。
「士官学校の飲み会でもそうだし、それに村の成人式の時だって……」

……村の祝宴で僕は盛大に吐いたあげくこいつに介抱されてその後散々冷やかさたんだ。思い出したくない僕の黒歴史だ。



えっ？嘘……これ……隊長……いや……

お、目が覚めたか
大人しくしろよ……って
まあ動けねえか

俺の特製ブレンドを
無警戒にグイグイ
空けたからなあ



リーシャに頭が上がらないのだ。少し話題を変えないと。
「そういえば隊長は？」

「い、いいよその話は」
慌ててリーシャの話をさえぎる。
こういう類の話が沢山あるから、僕は



上司として当然だろお
ほらもつと楽に楽に♥

やめて…
な、何を…？

何って歓迎会で
潰れた新人を介抱して
やってんだよ



それはリーシャも同じなのか、顔が赤い気がする。
「ねえ、あのさ、あ、あたし昨日……」

「さあ？ 飲みすぎて二日酔いで寝込んでるんじゃないの？」
なるほど、そうかも知れない。



俺のが気に入ったか？
お前のま●こが初めて
啜えた●ぽだ♥

あつ…♥
ちよ…だめえつ♥

おいどうした新人
我慢しなくていいぞ



それはリーシャも同じなのか、顔が赤い気がする。
「ねえ、あのさ、あ、あたし昨日……」

「さあ？飲みすぎて二日酔いで寝込んでるんじゃないの？」
なるほど、そうかも知れない。



俺のが気に入ったか？
お前のま●こが初めて
啜えたち●ぽだ♥

あつ……♥
ちよ……だめえつ♥

おいどうした新人
我慢しなくていいぞ



剣技の自主練しようよ。ストレス発散だ」
僕の背中をバシッと叩くリーシャ。
……何を言いかけたんだろう。

「え、なに？聞こえなかった」
「……ううん。なんでもないっ。そうだ、
午後の空き時間にさ、練兵場であたしと



お前みたいな手間のかかる
部下とはもつと親睦を
深めんといかんなあ♡

あ……あ……♡
いや……こんな……
隊長なんかに……

ふう……♡
性格もま●こも
生意気な奴だ

「ふいっ。今日も終わるか」
開放感から大きく伸びをする。
「あ、あたしちよつと呼ばれてるから」
「また？さてはなんかやったな？」
「バカ、違うわよ。只の連絡」
僕の鼻を指ではじくと、リーシャは



詰所へと歩いていった。
ちなみに隊長の部屋は詰所の二階に
あり、隣の僕達の寮とは違って少し豪
華な部屋があてがわれているらしい。
そこにリーシャは何度か呼び出され
ている様だった。

今門前には僕一人しかない。隊長は
非番。リーシャは遅刻……だろうか？
あいつが寝坊とは珍しい。

小さい頃から幾度となく、まだ寝てい
る僕のベッドから強引に毛布を引っぺが
されたものだった。



明日は非番だから
朝までじつくり
可愛がってやる

あたしは
朝番ですけど…

構わねえよ遅れても
どうせヒョロ男は何も
言わんだろ

僕が騎士を目指すために王都に行くと
言ったときも、いつのまにかリーシャも
一緒にいく事になってたりして。二人と

も受かった時は正直驚いたなあ。
本人曰く筆記はダメだったけど実技で
取り返したらしい。

それにここ数日で
気付いただろ？
体の相性が良いことに

そんなこと…
あたしには
わかりません

まあ、俺しか男知らん
か…しかしあいつも
残念だったなあ

卒業後の進路だって、まさか同じ騎士
団になるなんて。まあ、あいつに言われ
て変えたんだけど。故郷の村も近いし。

その時も周りから散々冷やかされたな。
あいつは一体、僕の事をどう思ってい
るんだろう……。



人が立っていた。
「まったく、隊長には黙っとくけど、バ
レたら大変だぞ」

「ごめん、遅れちゃった……」
「うわあっ、なんだリーシャか」
思い悩む僕の隣にいつの間にか当の本

それが今じゃ
すっかり俺専用ま●こ
ってワケだ♥



ヒョロ男に捧げようと
健気に守ってたん
だよなあ？

っ…それは
だって…ずっと
アイツの事が…



心なしか顔も赤いし、表情もボーっとしてる感じがだ。
「ううん、大丈夫だよ」

「う、うん」
「一体どうしたんだよ、体調でも悪いのか？」



こんな風に弱点を
じっくり責めてやると...

それにはら
お前の好きな所も
大分わかってきたぜ

あつ♡いやっ♡
そこダメえっ♡♡



心なしか顔も赤いし、表情もボーっとしてる感じだ。
「ううん、大丈夫だよ」

「う、うん」
「一体どうしたんだよ、体調でも悪いのか？」



こんな風に弱点を
じっくり責めてやると...

それにほら
お前の好きな所も
大分わかってきたぜ

あつ♡いやつ
そこダメえっ♡♡



人じゃないっていうか……」
そうかなあ……と、釈然としない表情を
浮かべてしまう僕だった。

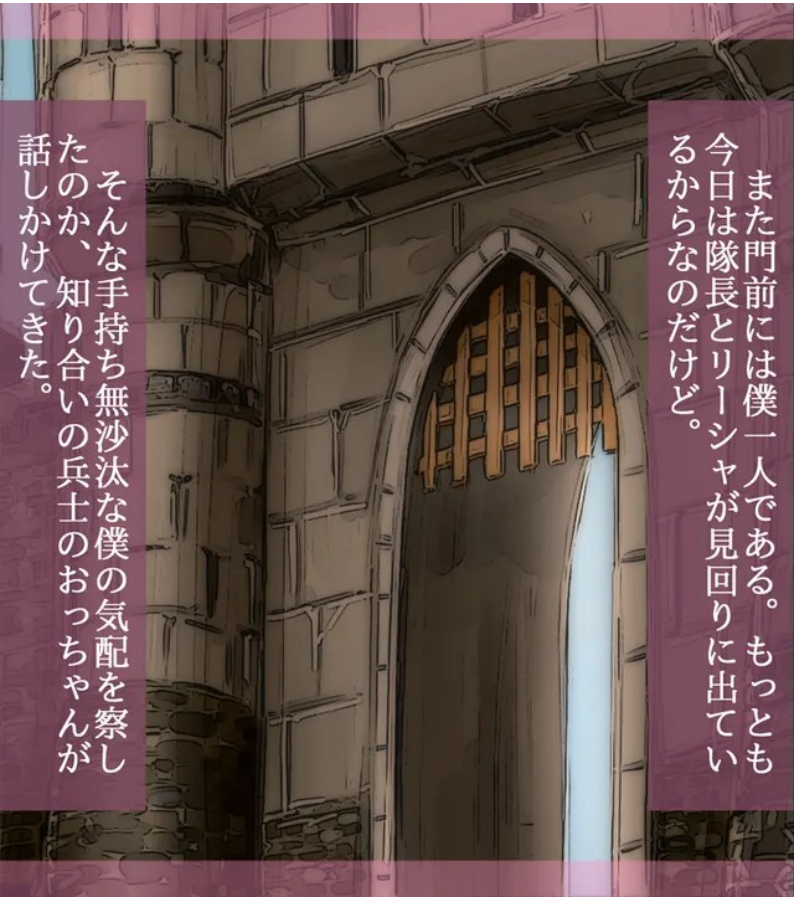
「ひょっとして昨日ほんとに隊長に何か
嫌な事言われたとか？」
「違うって。それに隊長もそんなに悪い

まだ始まったばかりだ
このまま朝までじっくりお前の
体に男の味を教えてやるよ



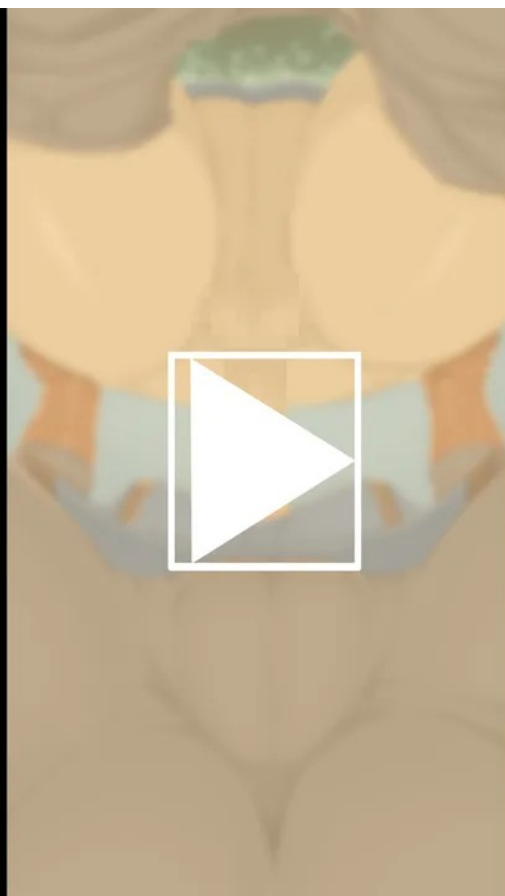
おほく良い締めまり♡
ほらもつと足を絡めろ
そう良い子だ

あっ♡許して♡
いやあっ♡もう
イってるからあ♡



そんな手持ち無沙汰な僕の気配を察したのか、知り合いの兵士のおっちゃんが話しかけてきた。

また門前には僕一人である。もっとも今日は隊長とリーシャが見回りに出ているからなのだけど。



おいこつち来てしゃがめ
いいからほら

さっさと啜えろ
大丈夫だって
誰もいねえよ

「あれ、今日のはあの子おらんの？あの子
よっと強い強そうなアンタの彼女」
「今城壁周りを巡回中で……、って別に

リーシャとはそんなじゃないですよ」
「そうかい？いつもここで仲良う喋つと
るが」

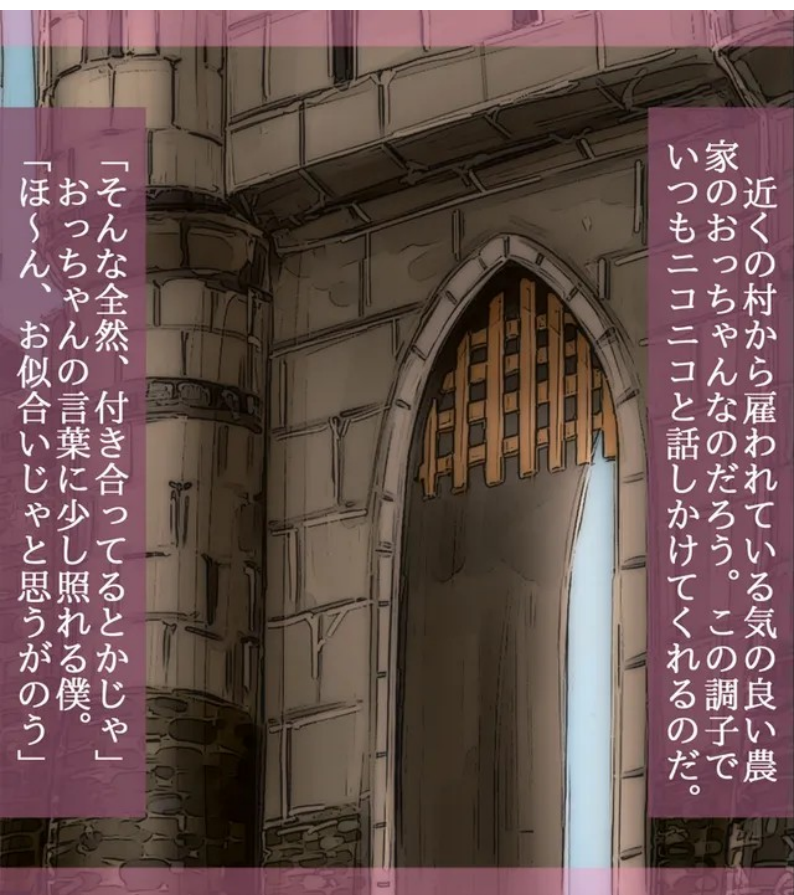
そうだお前の
大好きな隊長様の
ち●ぽだ



いつも通り
丁寧じゃぶれよ？

近くの村から雇われている気の良い農
家のおっちゃんなのだろう。この調子で
いつもニコニコと話しかけてくれるのだ。

「そんな全然、付き合っているとかじゃ」
おっちゃんの言葉に少し照れる僕。
「ほくん、お似合いじゃと思うがのう」



ちょっと前までは
嫌な顔してたくせに



今じゃこんなに
嬉しそうにち●ぽに
吸い付きやがって

「騎士の兄ちゃん、奥手なんか？ ああいうじゃじゃ馬はガツンとこっちからいけば、意外としおらしくなるもんだで。ワ

シも若い頃はそれで今のカミさんを……、あの頃は、村一番の美人で……、それが今じゃあオーガよりも……」

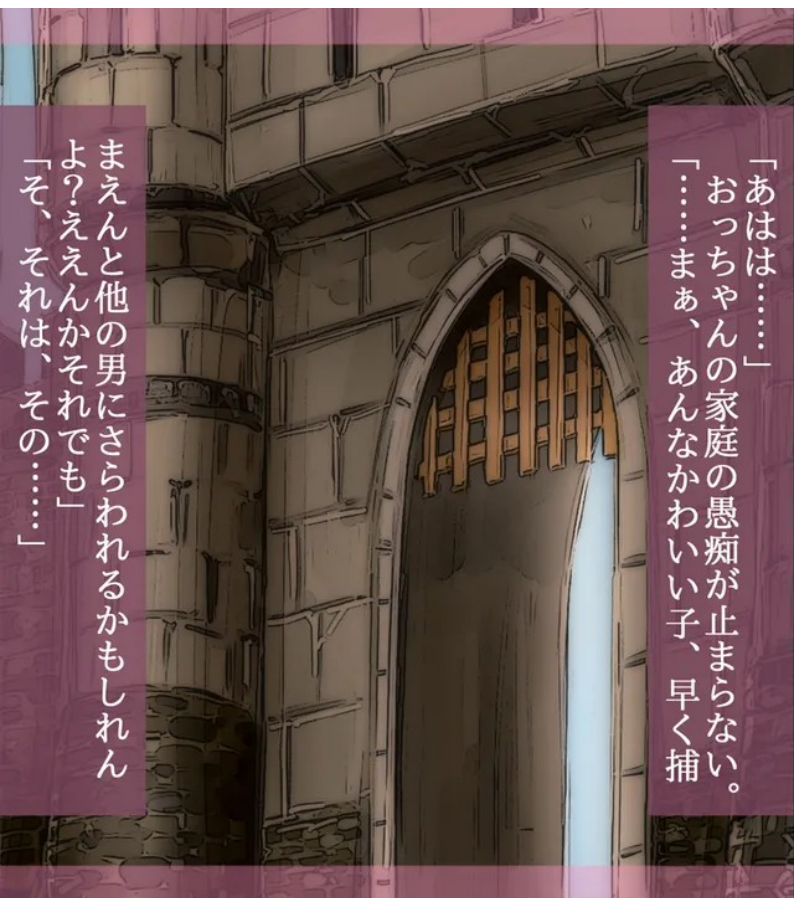
[illegible]

ヒョロ男が見たら
どう思うだろうな？
くくくっ

「あはは……」
おっちゃんの家庭の愚痴が止まらない。
「……まあ、あんなかわい子、早く捕

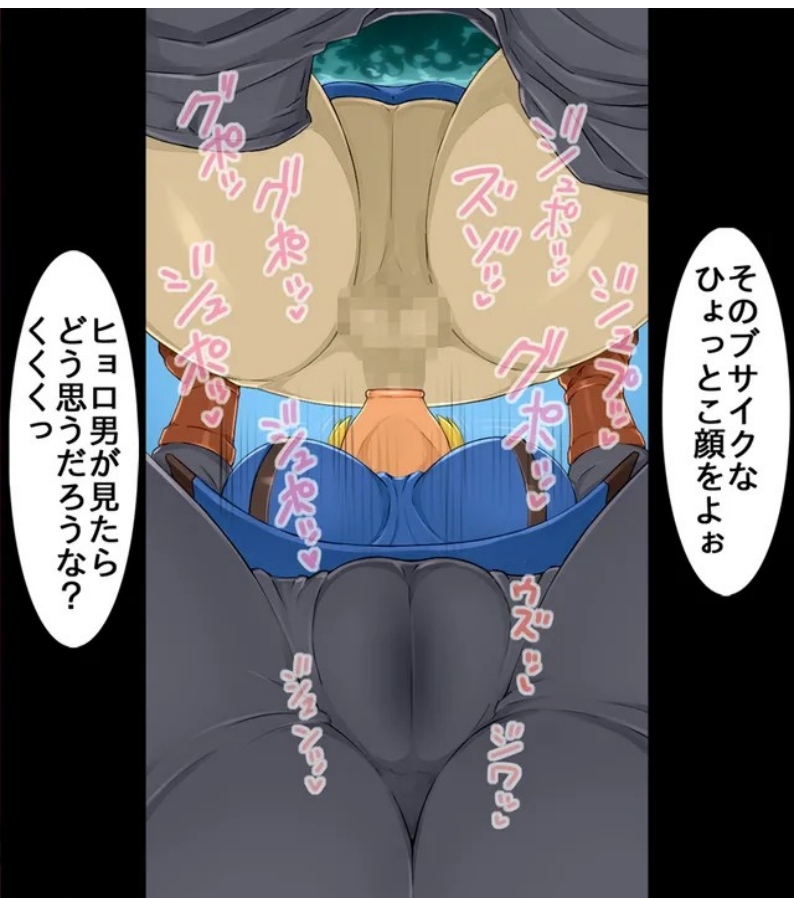
「まえんと他の男にさらわれるかもしれんよ？ ええんかそれでも」
「そ、それは、その……」

「まえんと他の男にさらわれるかもしれんよ？ ええんかそれでも」
「そ、それは、その……」



「まえんと他の男にさらわれるかもしれん
よ？ええんかそれでも」
「そ、それは、その……」

「あはは……」
「おっちゃんの家庭の愚痴が止まらない。
「……まあ、あんなかわいい子、早く捕



「ヒョロ男が見たら
どう思うだろうな？
くくく」

「そのブサイクな
ひよっとこ顔をよお

ぐっ…おっ…おっ
ねっとり吸い出せ
あゝたまらん♡

確かに今の友達みたいな距離……。本当にこのままでいいのだろうか？おっちゃん、の言葉に思わず動揺してしまう。

「それに、あの隊長さんには良くねえ噂が……、おっと、ワシもう行くわ。またな騎士の兄ちゃん」

「おう、戻ったぞ」
兵士のおっちゃんを入れ替わる様に
隊長達が巡回から帰ってきた。
「でな、リーシャが気分悪いから詰所で
休むんだとよ。おいリーシャ、どつ
ちに付き添って欲しい？」

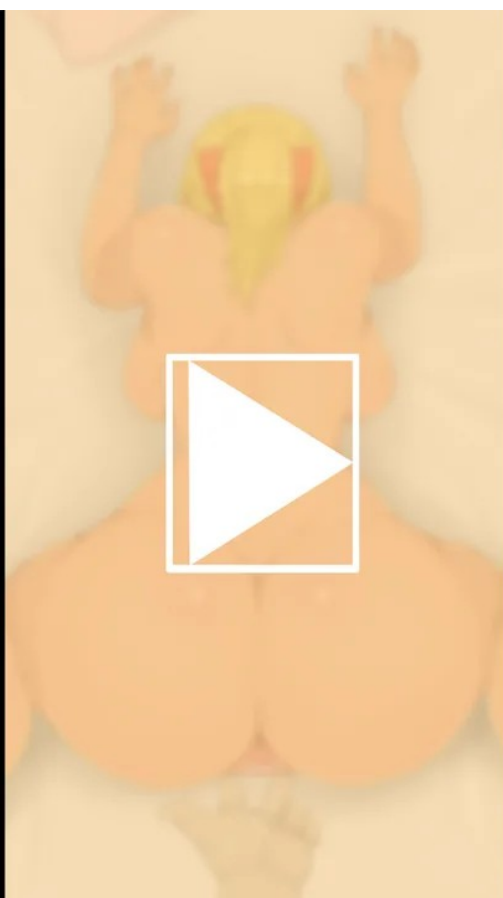


「……隊長……に」
「だそうだ。おいヒョロ男、ここは任
せた。喋ってねえで集中しろよ」
「は、はい……。了解です」
大丈夫かなリーシャ。なんか顔赤か
ったし歩き方も変だったけど……。



「何よ、さっきからチラチラこっち見て」
「いや、別に……」
ダメだ……。先日おっちゃんに言われ

たせいで僕は変に意識してしまっていた。
見慣れたはずのリーシャの横顔が、普
段とはまるで違って見える。





「そ、そう?ならよかった」
二人を包むぎこちない空気を破る様に、
予め準備していた用件を切り出す。

「その……この前は大丈夫だった?」
「え?う、うん。ごめんね、ちよつと気分が悪くなったただけだから」

だって……
あたし……もう……♡

ち●ぽしゃぶってたら
欲しくてたまらなくな
ったってかあ?



おいおい
もうこんなに
なってるのか



素直に謝るリーシャ。
去年までの彼女ならならむしろ奢れと
言ってくるぐらいだったのに。

「そういえばさ、僕明日誕生日なんだ」
「あ、そうだったね。すっかり忘れてた。
まだ何も用意してないや」

あっ♡
焦らすのダメえっ♡

傑作だったぜ
ヒヨロ男の間抜け面



ヒヨロ男
ほっといてさ
隊長に…♡だもんなあ

まさかアイツも
お前が仕事さぼって俺に
このけしからんケツを



あんっ♡
隊長のち●ぽ
きたあっ♡

突かれまくってる
とは思わんよなあ

うう、なんか調子狂うなあ。
でもこんなしおらしいリーシャがむし
ろ可愛く見えるというか……。

なんだろう、胸が苦しい。
今までこんな事なかったのに……。
「ごめんって。今度何か買うよ」

おらっこのケツデカ女
反省しろ反省
エロい体しやがって



あすあ
つごつ
♡♡♡
あ♡♡
あ奥♡
あんまイ
つでく
♡♡♡
♡♡♡

ヒヨ口男みたいな童貞
困らせてすいません
ってなあ

そういつて僕の頭を抱え乱暴に撫でる。想像以上に柔らかな感触に戸惑う僕。と、そこに日没の鐘が鳴り響いた。



「あの、明日なんだけど」
「なにになに？」

「夜、金の豚亭に予約取っててさ」

おらっこのケツデカ女
反省しろ反省
エロい体しやがって



あすあ
つごっ
♡♡♡
あ♡あ
あ奥♡
あんま♡
っでイ
♡♡♡
♡♡♡

ヒヨ口男みたいな童貞
困らせてすいません
ってなあ

そういつて僕の頭を抱え乱暴に撫でる。想像以上に柔らかな感触に戸惑う僕と、そこに日没の鐘が鳴り響いた。

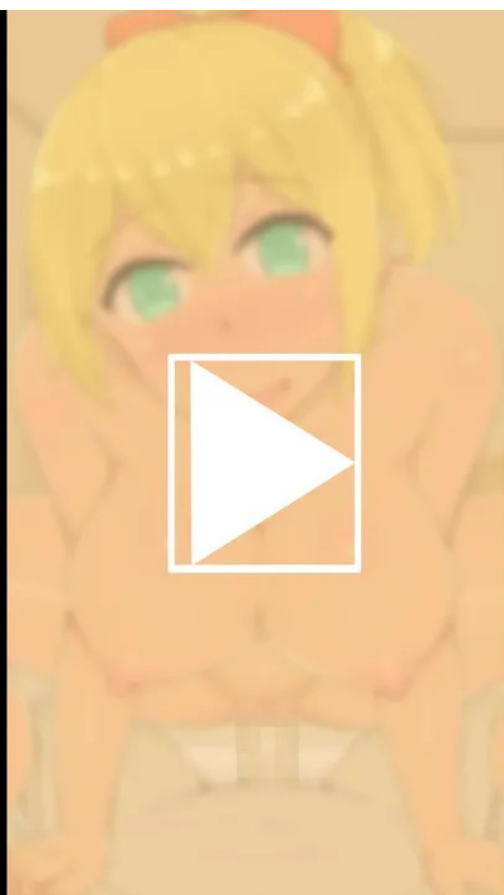


「あの、明日なんだけど」
「なにになに？」

「夜、金の豚亭に予約取っててさ」

……………僕が金の豚亭から騎士団寮に帰
ってきた頃には、辺りはもうすっかり真
つ暗になっていた。

結局、リーシャは来なかったな……………。
堀の暗い水面には明るい月と一緒に、
今日の浮かれた僕が映っていた。



リーシャお前
今日先約があっ
たんだって？

は、はい
幼なじみに夕食に
誘われてて

あの同期の
ヒヨ口男

はい：その子が
誕生日でお店予約
してたみたいで

金の豚亭といえ
ば城下町でも指
折りの有名店
である。味はと
びきりで財布に
も優しいとくれ
ば、その評価も
当然だろう。

恋人達に人気
の二階個室席を
予約できたのは
幸運だった。聖
誕祭の時期なら
まず無理だった
はずだ。

誕生日！
それ行かなくて
大丈夫？

んっ♡
それはその…
隊長に…

俺に？

部屋に
呼ばれて…
♡あっ♡

給料をはたいた服に着替え、髪を整える。逸る心を抑えられずに、予約の一時間前には店に着いてしまっていた。

店員さんに事情を告げるとケーキのサービスとサプライズのロウソクでの演出を協力してくれる、という事になった。

でも断らなかつたよな
大事な約束でしかも
話があるってのに

はああ
いうの
:
:
:
♡ ♡



愛の告白かもよ？
ヒョ口男がお前に

そんな…
あたし…
♡

約束の時間が近づくほどに高鳴る鼓動。店内に響く時計の鐘がついにその時が来た事を僕に告げた。

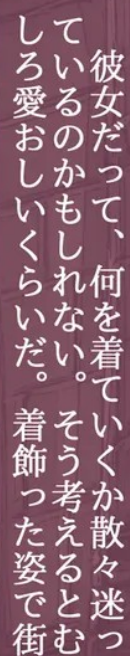
しかしまだリーシャの姿は見えない。
とはいえそんなわずかな遅刻に怒る程、
僕は野暮ではない。

あっ♡あ♡あ♡
急に♡
激し♡

あ、隊長、あたしっ
おまけにも呼ばれたっ
●こが体がつ
♡♡

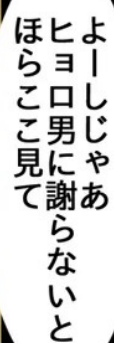
あっ♡あぁっ♡
急に♡
激し…っ♡

あ、隊長、あたしっ
おまけにも呼ばれたっ
●こが体がつ
♡♡

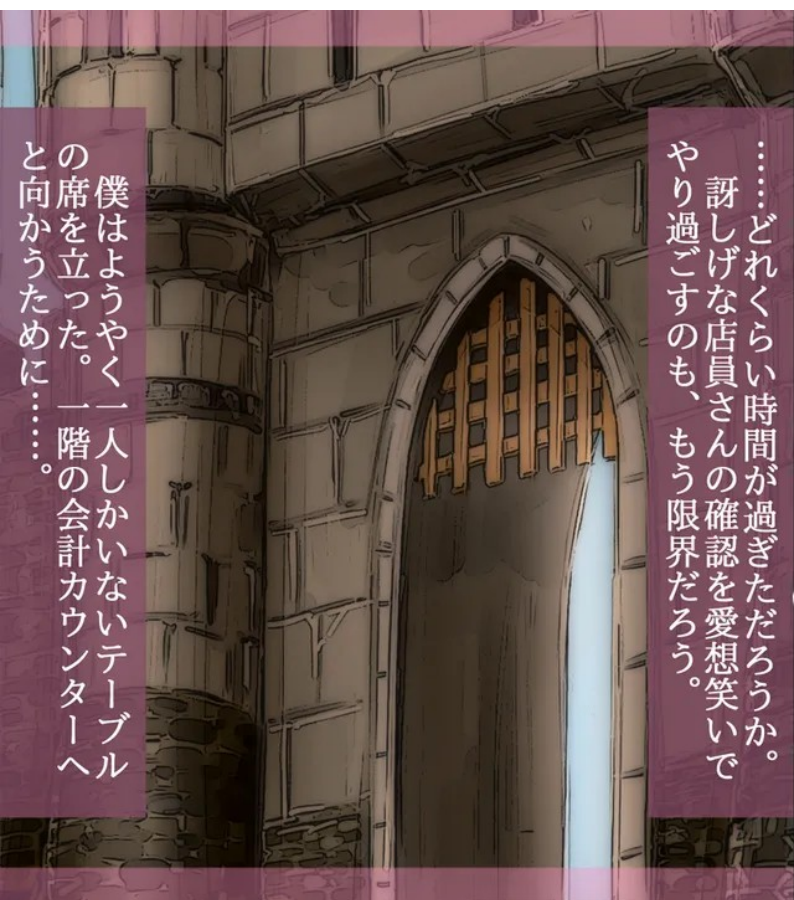


すっぽかした理由
ちやんと言った
あげよつか

あ、隊長、あたしっ
おまけにもうばが
●でも呼ばれたっ
こがうばがたっ
♡♡



あっ♡あぁっ♡
急にっ♡
激しっ♡



僕はようやく一人しかいないテーブルの席を立った。一階の会計カウンターへと向かうために……。

……どれくらい時間が過ぎただろうか。訝しげな店員さんの確認を愛想笑いでやり過ごすのも、もう限界だろう。



部屋来てすぐに物欲しそうな顔してたもんなあ

おいおい
リーシャま●こ
ちよろすぎんだろw

あいつと話してる時も
ずっと隊長のおち●ぽの
で頭がおいっぱい
だったの♡

グチヨグチヨに濡れ
ちゃってえ♡ぶっとい隊長
おち●ぽハメられたくて
我慢できないの♡

なんかかわいいそう
だからさっしヨロ男に
ほらお祝いメッセージ

誕生日おめでとう♡
ごめんね…♡今日いけ
なくて…あんたとの約束
より隊長のおち●ぽ

ヒヨロ男見ってる？
これ俺からの誕生日祝いね♡
今夜はこれでシコレよw

選んじやった…♡
明日は隊長とあたし非番
だから一日中本気種付け
セックスの予定だよ♡

——そして今店員さんから憐れみの目と
共に渡された小さなケーキを手に、とぼ
とぼと歩いて帰ってきた所だ。

「部屋で一人で食べるかこれ、はは……」
暗い水面に映った月がぼんやりと滲む。
どうして、リーシャは……。

暗い廊下の床で何かが光っている。
丁度僕の部屋の前だ。近づいて見る
とそれは映昌機だった。おそらくはボ
ーマン隊長の物だろう。なぜなら僕達
新人の分はまだ届いていないからだ。
しかしなぜこんな所に？訝りながら



も、そっと拾い上げてみる。士官学校
で使っていた物とほぼ同じだ。起動し
たままなのだろう、画面が光っている。
ん？動画、か？これって……。
僕は思わず再生ボタンを押した……。
く 騎士編完く

